

図書紹介

Jayawickrama, N. A. (tr.). *The Sheaf of Garlands of the Epochs of the Conqueror being a translation of Jinakālamālipakaraṇaṃ of Ratanapañña Thera of Thaliand.* (PTS Translation Series No. 36), London: Luzac & Co., 1968. xlvii+235 pp.

本書は、スコタイ史々料として知られる Jinakālamāli の初の英訳である。(これまで Jinakālamālinī と呼ばれていたが、語末の nī は、“この”を指す指示形容詞であるから、誤用というべく、Jinakālamāli が正しい。v. xxxvi) 1923年に発表された G. Coedès の仏訳は、後半のみの部分訳であったから、本書は、この史書の西欧語への初の完訳である、といえよう。

Jinakālamāli のパーリ語原文から、タイ語への翻訳が、すでに1794年、現バンコク王朝の創設者、ラーマ1世王の勅命により、Phra Wichien Prichāら、5人の学者によって試みられ、1908年、原文とともに出版されていることはよく知られている。1939年には、Sathien Phantharangsī による改訳があらわれ、さらに1958年には、地名・人名の比定に新研究の成果をもちこんだ、Saeng Manawithūn による新訳が発表され、1923年の Coedès の訳業以来、ほとんど進歩をみせなかった Jinakālamāli 研究が大きく一歩前進したのであった。(1956年に Ven. A. P. Buddhadatta Aggamahāpaṇḍita によるシンハリ語訳が出版されているが未見)

1962年のパーリ語テキストの出版に引き続き、今回、Pali Text Society によって、諸研究の成果を充分にとり入れた英訳完訳が公にされたことは、タイ史研究に寄与するところ大なるものがあるだろう。とくに、1958年のタイ語新訳の訳者である Dr. Saeng および、かねてより、Jinakālamāli の科学研究の必要性を力説してきた Dhanit Yupho 前タイ国芸術局長が、翻訳に全面的に協力していることのメリットは、タイ史にあらわれる地名・人名の

新しい比定が豊富に盛りこまれた脚注の中にはっきりとあらわれており、この訳業の価値を高からしめている。巻頭におかれた Dr. Saeng の論文“Some observations on the Jinakālamālipakarana”は、タイ国における Jinakālamāli 研究の水準を示したものとして、注目に値しよう。Jinakālamāli は、これまで、もっぱらスコタイ史々料として利用されて来た (Damrong: 1914, Coedès: 1917)。しかし、著者 Ratanapañña Thera の、スコタイ史にかんする知識が、アユタヤ史についてのかれの見とくらべ貧弱であることは、すでに Prince Damrong によって指摘されているところであり、スコタイ史々料としての価値は、それほど高いとは言えない。本書の真価は、むしろ、著者の故郷であるランナータイ史、とりわけ、ランナータイへの上座部仏教弘通の歴史にあり、この点、史料価値の再評価が行なわれてしかるべきであろう。この訳業の出現によって、これまで顧みられることの少なかった、北タイ史、および、北タイ仏教史の研究が、新しい展開を示すことを期待したい。

(石井米雄・東南ア研)

Phya Anuman Rajadhon. *Essays on Thai Folklore*, Bangkok: The Social Science Association Press of Thailand, 1968. ii+383 pp.

本書は、タイ国の「柳田国男」とも言うべき、タイ民俗学の泰斗、アヌマン・ラーチャトン博士の英文著作集である。この一世の碩学は、タイ国史改訂委員会の委員長として、世紀の大事業である「タイ国百科辞典」の総編集者として、また、チュラロンコン大学の言語学、比較文学、タイ民俗学の教授として、おとろえを見せぬ学的活動を続けていたが、本年7月1日、午前8時50分、トンブリにあるシリラート病院の一室で、多彩な生涯の幕を閉じた。昨年12月、80才の誕生を祝ったばかりであった。

本書はアヌマン博士80才の誕生日を記念して上梓